

外来語動詞的用法の文法的特徴に関する日韓対照研究

—スル・ハダ動詞と機能動詞表現を中心に—

林 廷修（筑波大学大学院）

要旨

本発表は、日本語と韓国語における外来語の動詞的用法を3つに分類し、各パターンの差を統計的な手法で検証したものである。具体的には、外来語にスルやハダが直接付く「複合型」、外来語とスル・ハダの間にヲ格が挟んでいる「ヲスル型」「ウル(ルル)ハダ型」、そしてスルやハダ以外の動詞が付く「機能型」に分類した。パターン間の比較の結果、同じ西洋由来の外来語であっても、日本語は「複合型」「機能型」に、韓国語は「ウル(ルル)ハダ型」「機能型」に偏っていることが明らかとなった。これにより、日本語又は韓国語の中に組み込まれた外来語使用の文法体系は類似しているものの、動詞的用法のパターンには違いがあることが分かった。

1. はじめに

日本語には外来語起源の語幹にスルを添える形と、外来語を名詞化してヲスルを添える形、さらに外来語の語幹に機能動詞¹を添える形が存在する。韓国語の場合、日本語のスル代用でハダが付く点では異なるが、これに似たような用法が見られる。本発表では、この三つの形式をそれぞれ「複合型」、「ヲスル型」(日本語)「ウル(ルル)ハダ型」²(韓国語)、そして「機能型」と称する。両言語における具体例は、以下の通りである。

- | | |
|-----------------|--|
| (1) a. コメントする | b. ^{コメント} ^{ハダ}
코멘트하다 |
| (2) a. コメントをする | b. ^{コメント} ^{ルル} ^{ハダ}
코멘트를 하다 |
| (3) a. コメントをつける | b. ^{コメント} ^{ルル} ^{ダルダ}
코멘트를 달다 |

(1a)～(3b)のすべてはそれぞれの表現形式が異なるものの、ほぼ同様な意味をもつと考えられる。従来、日本語のスルと韓国語のハダの関係については数多くの研究がなされてきたが、ヲスル・ウルハダや機能動詞的な表現を含めた形での対照分析は未だ不十分である。そこで本発表では、外来語の動詞的用法における3つのパターンを対象とし、そこから見られる日韓の違いを明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の2点を述べる。

¹ 本発表では、一般動詞が機能動詞として使われているようなものも含んでいる。

² 日本語のヲ格に相当するものとして、韓国語のウルとルルの二つが存在する。ウルは子音で終わる音節の後に用いられ、ルルは母音で終わる音節の後に用いられるという違いがある(姜1993)。以下では、便宜上「ウルハダ型」と呼ぶことにする。

- ・ 同じ西洋由来の外来語でも日本語は「複合型」「機能型」に、韓国語は「ウルハダ型」「機能型」に偏っている傾向が見られる。
- ・ 日本語の外来語は名詞性と動詞性をほぼ均等にもつものに対し、韓国語の外来語は相対的に名詞性が強いと推察される。

2. 先行研究

これに関連する日本の先行研究には、村木(1982、1991)、茂木(2015)などの研究がある。一方で、韓国の先行研究には、홍(1999)、홍・박(2004)などがある。これらの先行研究は、各言語におけるスル・ハダやヲスル・ウルハダ又は機能動詞の統語的、意味的側面に焦点を当てて論じている。しかし、日本語と韓国語を取り上げ、両言語における3つのパターンを対照分析した研究は今までのところ存在しない。そこで本発表は、文法的類似性の高い日本語と韓国語を対象に、「複合型」と「ヲスル型」「ウルハダ型」及び「機能型」の間に差があるかどうかを、データからの出現用例数に基づいて明らかにしようとするものである。この分析を行うことにより、外来語という新しい言葉が日韓の言語にどのように組み込まれるのかの様子が窺えると考えられる。

3. 分析対象と方法

分析対象は、以前日韓新聞の使用実態について発表した林(2020)と同様に、日韓の新聞で動詞としての使用が観察された外来語(92語)を用いた。また、分析は新聞からの用例抽出、形態素解析の実施、実施結果を基にした母語話者調査、そして統計的検証の4段階の手順で実施した。第一に、上述の外来語を日本の『毎日新聞』と韓国の『東亜日報』(2018年、総合、社会、国際、経済、スポーツ面)で検索し、対象外来語が含まれている文を抽出した(日本語20,714、韓国語30,682)。第二に、形態素解析(日本語はMecab、韓国語はMecab-ko)を行い、複合名詞の外来語と外来語に後続する格助詞と動詞の間に副詞などが挟む場合は分析対象から除外した。その上、表1の基準で対象を選定し、「複合型」と「ヲスル型」「ウルハダ型」、そして「機能型」に大別した。第三に、「複合型」と「ヲスル型」「ウルハダ型」、また「複合型」と「機能型」の意味的な交替が可能か否かを、日本語母語話者と韓国語母語話者それぞれ3名に調査した。その後、各母語話者の内省判断が完全一致する場合、且つ全体出現用例数が5例以上のもののみを扱うこととした(異なりは両言語とも36語、延べは日本語が3,795語、韓国語が1,496語)。第四に、日韓で3つのパターンの頻度に差があるかどうかを確

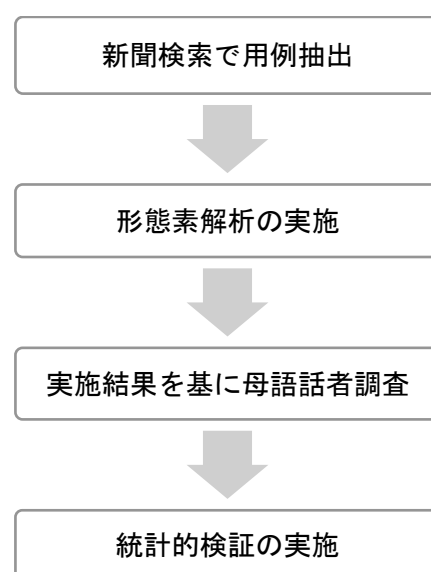


図1 分析方法の手順

表1 分析対象とする外来語の例

日本語		韓国語 ⁴	
(a) 外来語+動詞	対象	(a) 外来語+動詞	対象
(b) 外来語+助詞+動詞	対象	(b) 外来語+助詞+動詞	対象
(c) 名詞+ (a) / (b)	対象外 (複合名詞)	(c) 名詞+ (a) / (b)	対象外 (複合名詞)

認するため、フィッシャーの正確確率検定を実施した³。さらに、パターン間の数の偏りが統計的に有意である場合、どの項目のどのパターンがその有意性に影響したのかを判定するための、残差分析も行った。

4. 分析結果

4.1 日韓外来語の全体的な使用傾向

3つのパターンは、文法的に動詞として扱われる「動詞型」(複合型)と、そうでない「名詞型」(ヲスル型・ウルハダ型、機能型)の2つに分けることができる。まず、日韓両言語において対象となる外来語をこれらの2つに大きく区分し、全体的な傾向を把握する。

表2は、両言語において出現用例数が5例以上のもの(異なりで36語)を基に「動詞型」とそうでない「名詞型」のどのパターンが多いかをクロス集計したものである。具体的には、「動詞型」が全体用例の2/3以上であるもの(G1)、「名詞型」の用例の合計が全体用例の2/3以上であるもの(G3)、「動詞型」と「名詞型」がほぼ同程度もの(G2)に分類した。

表2 日韓の外来語とパターン別のクロス集計表

区分		韓国語			
		G1	G2	G3	計(%)
日本語	G1	20	2	5	27(75.0)
	G2	0	3	0	3(8.3)
	G3	1	3	2	6(16.7)
	計(%)	21(58.3)	8(22.2)	7(19.4)	36(100.0)

日本語では「動詞型」の多いG1のグループに該当するものの、韓国語ではそうでない外来語の割合が25.9%(7語/27語)を占める。反対に、韓国語では「動詞型」の多いG1に分類されるのに対し、日本語はそうでないものの割合が4.8%(1語/21語)である。つまり、日本語において「動詞型」の使用が顕著であることが分かる。個別の外来語におけるこれらのパターンにどのような差があるのかをより詳細に見るため、次節では統計的な処理を基にした分析結果を示しながら説明する。

³ 複数の頻度データに意味のある差(有意差)が存在するかどうかを検証するための手法に、 χ^2 二乗検定とフィッシャーの正確確率検定とがある。ただし、 χ^2 二乗検定は標本の大きさにより結果が信頼できない場合があるため(小林2014)、標本の小さいデータにも用いられるフィッシャーの正確確率検定を適用する。

⁴ 韓国語の(a)は、形態素解析のタグ付けがVV(動詞)の活用形、XSV(動詞派生の接尾辞)の活用形のものである。また、XSA(形容詞派生の接尾辞)の活用形も一部あるが、これはタグ付けの誤りであるため、修正して反映した。また、(b)の助詞としてはJKO(目的格)、JKB(副詞格)、JKS(主格)が含まれている。

4.2 日韓両言語と外来語の動詞的用法との関係

ここでは、日韓両言語における外来語の用法の間にどのような特徴があるかをより詳細に検討するため、「複合型」、「ヲスル型」「ウルハダ型」、「機能型」に細分化することにする。以下では、日韓でこの3つのパターンの頻度に統計的な差があるかということと、差がある場合はどのように違うのかということの2点について見ていく。これらを見るためフィッシャー検定と残差分析を行った。

表3は、フィッシャー検定の結果、日韓両言語と3つのパターンの中で5%水準の有意差が見られた17項目のパターン別の用例数と残差分析の結果を示したものである。一方で、有意差がないものとして「アピール」「コントロール」「マーク」(19語)などが見られたが、紙面の都合により詳細は省略する。

表3 日韓外来語のパターン別頻度差の検定

区分	日本語				韓国語				フィッシャー 正確検定p
	計	複合型	ヲスル型	機能型	計	複合型	ウルハダ型	機能型	
ゴール	31	31	0	0	378	0	0	378	0.000
サイン	47	47	0	0	60	24	25	11	0.000
ジャンプ	27	27	0	0	28	21	5	2	0.010
スタート	450	331	2	117	7	1	0	6	0.004
パレード	11	11	0	0	13	0	7	6	0.000
パンク	8	7	1	0	7	0	0	7	0.000
ファウル	5	4	0	1	10	0	8	2	0.001
プレー	583	463	120	0	71	24	25	22	0.000
コメント	531	337	1	193	8	5	1	2	0.034
チェック	177	164	5	8	108	107	1	0	0.028
テスト	14	11	1	2	57	44	13	0	0.025
キス	28	10	18	0	22	13	6	3	0.008
ダウン	17	5	0	12	18	18	0	0	0.000
パス	92	30	4	58	46	16	30	0	0.000
マッサージ	8	2	2	4	21	11	10	0	0.006
メモ	31	14	1	16	30	20	10	0	0.000
インタビュー	22	16	1	5	131	89	42	0	0.000

■：残差分析結果、5%水準で有意に多い ■：残差分析結果、5%水準で有意に少ない

- ・「複合型」の全体出現用例数が多く、統計的にも有意であるもの
ゴール、サイン、ジャンプ、スタート、パレード、パンク、ファウル、プレー
- ・「複合型」の全体出現用例数が多いが、統計的には有意でないもの
コメント、チェック、テスト
- ・「ヲスル型」の全体出現用例数が多く、統計的にも有意であるもの
キス

- 「機能型」の全体出現用例数が多く、統計的にも有意であるもの
ダウ、パス、マッサージ、メモ
- 「機能型」の全体出現用例数が多いが、統計的には有意でないもの
インタビュー、チェック、テスト

パターン間の比較結果によると、同じ外来語であっても日本語は「複合型」「機能型」に、韓国語は「ウルハダ型」「機能型」に偏っていることが明らかである。日本語の「複合型」に有意差が認められるものは8語であるのに対し、韓国語は2語しか見られない。一方、これとは対照的に日本語の「ヲスル型」に有意差が認められるものは1語であり、韓国語は8語であることが見て取れる。以下では、それぞれの例を挙げながら、見ていきたい。

A 「複合型」の全体出現用例数が多く、統計的にも有意であるもの

まず、日本語において「複合型」の用例数が多く、統計的にも有意であるものに「サイン」「スタート」「プレー」などがある。ここに属する韓国語を見ると、大体「ウルハダ型」と「機能型」であるものが多い。「スタート」と「プレー」の日韓それぞれの具体例を以下の(4a)(4b)、(5a)(5b)に挙げる。

(4a) 6月にスタートした司法取引の初適用となった。 (2018年7月21日、総合面)

(4b) 푸틴 대통령은 포럼 개막 하루 전인 10일 아베 총리와 정상회담을 갖고 릴레이 정상회담의 스타트를 끝냈다. (2018년9월11일, 국제면)

プーチン大統領はフォーラム開幕の前日である10日、安倍総理と首脳会談を持ち、リレー首脳会談のスタートを切った。(筆者訳)

(5a) 2007年からは米大リーグでプレーした。(2018年4月5日、スポーツ面)

(5b) 정보경은 4분 내내 공격적인 플레이를 펼쳤지만 점수를 얻지 못했다. (2018년8월30일, 스포츠면)

チョン・ボギョンは4分間積極的なプレーを繰り広げたが、得点は得られなかった。

(筆者訳)

また、これ以外にも日本語の「パレード」や「パンク」に対し、韓国語では(6a)(6b)、(7a)(7b)のような例が観察された。

(6a) 2人は式後、城の周辺を馬車でパレードした。(2018年5月20日、政治面)

(6b) 대표단이 입고 퍼레이드를 펼칠 파카는 레드, 화이트, 네이비 등 삼색의 클래식한 콘셉트로 구성됐다. (2018년1월24일, 스포츠면)

代表団が着てパレードを繰り広げるパーカーはレッド、ホワイト、ネイビーなど、三色のクラシックなコンセプトで構成された。(筆者訳)

(7a) 同基地によると、主脚左側と前輪タイヤがパンクしたとの情報がある。

(2018年7月18日、社会面)

(7b) 타이어에 펑크가 나도 일정거리를 안전하게 주행할 수 있는 런-플랫 타이어를 장착했다.

(2018년 4월 9일, 경제면)

タイヤにパンクが生じても一定距離を安全に走行できるラン-フラットタイヤを装着した。

(筆者訳)

B 「ヲスル型」／「機能型」の全体出現用例数が多く、統計的にも有意であるもの

次に、日本語で「ヲスル型」の全体出現用例数が多く、統計的にも有意であるものに「キス」が、そして「機能型」の全体出現用例数が多く、統計的にも有意であるものに「ダウン」「パス」「メモ」などが見られた。このうち、日本語の「パス」「メモ」と、それに当たる韓国語の例が次の(8a)(8b)、(9a)(9b)である。

(8a) 前半 35 分には古橋にパスを出し、先制点をアシスト。 (2018年9月16日、スポーツ面)

(8b) 그는 “기성용은 양발로 정확도 높은 패스를 한다. … (2018년 6월 16일, 스포츠면)

彼は「キ・ソンヨン」は両足で精度の高いパスをする。… (筆者訳)

(9a) メモを取らなかつた点について成田さんは「人間なので忘れることもある。…

(2018年5月12日、社会面)

(9b) 건강한 밥상을 주제로 한 푸드스타일리스트 박선홍 씨의 강연에선 메모를 하는 청중이 특히 많았다. (2018년 7월 12일, 경제면)

健康な食卓をテーマにしたフードスタイリストのパク・ソンホン氏の講演では、メモをする聴衆が特に多かった。 (筆者訳)

C 「複合型」／「機能型」の全体出現用例数が多いが、統計的には有意でないもの

一方で、「複合型」又は「機能型」の全体出現用例数が多いが、統計的には有意でないものとして「インタビュー」「コメント」「チェック」「テスト」が挙げられる。これらの「機能型」における一部の例に「インタビュー／チェック／テストを行う／受ける」などが見られた。

4.3 日韓両言語の違いから導き出せること

以上により、日本語又は韓国語の中に組み込まれた外来語使用の文法体系は類似しているものの、動詞的用法のパターンには違いがあることが分かった。具体的には、日本語は「複合型」と「機能型」において有意差が見られたが、韓国語は「ウルハダ型」と「機能型」に有意差が見られた。このことから、日本語における外来語は名詞性と動詞性をほぼ均等に持っているのに対し、韓国語における外

来語は相対的に名詞性が強いと推察される。このような特徴により、外来語の受け入れにおいて次の2つの違いが生じていると推測される。まず、日本語はスルの結合だけでも動詞として文中で使用可能であるが、韓国語はそれが比較的難しいために「ウルハダ型」や「機能型」に拡張させていると考えられる。次に、その結果、日本語の場合名詞から動詞への品詞派生が起りやすいのに引き換え、韓国語は相対的に起りにくいということとも関連しているのではないかと思われる。

5. おわりに

本発表では日韓外来語の動詞的用法について、「複合型」、「ヲスル型」「ウルハダ型」、「機能型」の3つを取り上げ、分析を行った。各パターンの出現数を統計的な手法で検証した結果、日本語は「複合型」と「機能型」が、韓国語は「ウルハダ型」と「機能型」が目立つことが明らかになった。また、これにより、日本語の外来語は名詞性と動詞性をほぼ均等に有しているが、韓国語は相対的に名詞性が強いことを推察した。それ故に日本語はスルだけでも述語化可能であるものの、韓国語は比較的それが容易でないため「ウルハダ型」や「機能型」に拡張させている可能性を示唆した。今後、同じ借用語として見られる漢語との対比が重要な課題であると考えられるが、これについては今後さらに検討していきたいと考えている。

参考文献

林廷修(2020)「日韓の新聞からみた共通外来語の使用実態についてー計量的・文法的側面からー」『日本語学研究』63, pp. 109-124, 韓国日本語學會／姜宗出(1993)『教育院の総合的な韓国語上巻』韓国教育院／小林雄一郎(2014)「コーパス言語学研究における頻度差の検定と効果量」『外国語教育メディア学会(LET)関西支部メソドロジー研究部会報告論集』6, pp. 85-95／村木新次郎(1982)「外来語と機能動詞ー「クレームをつける」「プレッシャーをかける」などの表現をめぐってー」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4, pp. 226-211, 武蔵大学人文学会／村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房／茂木俊伸(2015)「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析:「マークする」を例として」『文学部論叢』106, pp. 83-95, 熊本大学／홍재성(1999)「기능동사 구문 연구의 한 시각: 어휘적 접근」『인문논총』41, pp. 135-173, 서울대학교 인문학연구원／홍재성・박만규(2004)「자동사적 기능동사의 통사・의미적 분석」『比較文化研究』7, pp. 265-283, 경희대학교 비교문화연구소